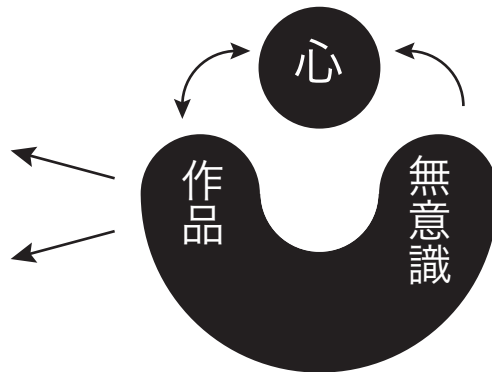


「自我」をもたない生物や無機物は、直接的に「物質」と「魂」に依存している。
人間は自我の仲介によって間接的に感じるようになっているが、依存していることでは同じである。
「存在する(=物質の運動と魂の介在)」という条件においては、すべてが等しいのだ。
そこで私はこう言ってみよう。

「おそらく世界は、心のつぶでできている」と。
これは「すべては心の反映である」とする唯識論と、心による世界の変容を認めない
唯物論との、私なりの混成試論である。全元論（あるいは無元論）と呼んでいる。



私の創作活動は、こうした私自身の思考を検証するための実験だと言える。

animals は、全元論にもとづいて世界を解釈した作品群である。
さみしいからだ は、「満たされなくて、動きつづけずにいられない身体」の物語である。

作品もメディアだから、自分の作品に何かを言わせることが重要なのではない。
そこに意識が、思考があるとわかり、対話が生まれることが大事なのだ。
あとは見る人が、作者が与えた以上の物語を作ってくれるだろう。

「・・・」は、私とあなたとの中間にある何かなのだ。

それは無ではなく、代数である。

何もないための沈黙ではなく、ありすぎるための沈黙。

語りえない、言葉の限界をも言葉で表現するしかない人間のジレンマなのである。

世界のしくみをさぐる。世界のしくみを語る。

「世界」を語ることは自己を語ることだ。

私が聞きたいのはあなたの世界観。

「世界」はどんな色をしている？好意的？それとも悪意に満ちている？

「自由」はどんな形をして、どんな運動をしながら、どこに向かっている？

人間に敵がいるとしたら、それは、「思考停止」という名の怠惰な心である。

私は今でも考えている。これからも考えつづけるだろう・・・